

学校にいけない・いかない子をもつ

# 親同士がつながる場

解決できる場ではないけれど、それを目指す一端となることを願って開催しています（事務局）

ー令和4年3月に参加された保護者の声をお届けしますー

今回は 学校現場の経験者にゲスト参加していただきました

## 「不登校のない学校をうたうと、子どもに無理をさせることになる。」

学校現場の声としてこのことをまず教えていただきました。

例えば、「いじめ」は絶対に許されることではなく、学校としてもいじめ防止のための計画を作成して一丸となって取り組むものです。

でも、「不登校」については、不登校ゼロを目指す学校が言うてしまうのは、不安感やしんどさのある子、少し休憩が必要な子にも無理をさせてしまい、結果としてよいことにはつながらないということだと思いました。

「子どもは学校に行くのが当たり前」という価値観は大人たちの中には根強くあります。でも、文部科学省では、不登校児に対する指導目標を登校することとはしていません。もちろんそれは別に学びの保障や場があってこそですが、当事者である子どもたちに対して、学校・家庭・地域の大人たちがもっと柔軟に考えられる意識改革も必要だと感じます。それがなければ、学びの保障を考えるためのスタートラインに立てないと感じるのです。

## 「学校がサポートするとってくれるだけで嬉しい」

そうはいうものの、子どもさんが学校へ行かなくなればどうしたらいいのかと考えるだけで保護者の気持ちも十分に分かります。周りの子どもさんが学校へ通う中、ご自分の子どもさんが通えなくなり、有田市にはフリースクールなどもない状況では、なおさらでしょう。

だからこそ、学校の先生のひと言が保護者の支えになるようです。不登校は長い目でみなければならないので、1年で担任が変わることの多い先生方との関係づくりには保護者も悩みながら進んでいます。

「保護者の方の意見は？」と一方的に聞かれるのではなく、一緒に考えるという姿勢を見せてくれたり、サポートしますと言ってくれるだけで保護者の気持ちにも変化が出るようです。

## 「毎朝見守りをしている方には行き渋りの子が分かる」

地域にも強力なサポーターがいます。登下校の見守りをしてくれている方はどの地区にもおられると思います。その方々は、子どもたちの自然な表情を見てくれています。

「最近、子どもさん肩落として歩いてるぞ」と声をかけてもらった保護者もいます。見守りの皆さんは、交通安全のためだけに立っておられるわけではありません。通学時間に姿を見ない子を気にかけ、子どもたちの日々の様子も見守ってくれています。家庭や学校では見せない顔をしている子もいるかもしれません。

こうして、大人たちがいろんな場面で子どもたちを見守り、お互いがその様子を共有できれば、子どもたちの変化により早く気づくことができます。有田市の小中学校には学校運営協議会という組織があり、その皆さんも不登校支援についていつも気にかけてくださっていると聞きます。

今回のゲストからの

ワンポイント  
アドバイス

教員に答えを求めるのではなく、子どもさんの日常の様子などを**伝え続ける**ことが大事だと教えてもらいました。そうした保護者とのコミュニケーションの回数が増えることで、多忙な教員も気かけ、子どもさんへのアプローチの適切なタイミングを図れるのだそうです。

## 学校へいけない・いかない子をもつ親同士がつながる場

奇数月の第3日曜日 午後1時30分～3時頃

AGALA2階（箕島本町商店街東入口付近） 駐車場有：AGALA東隣

事務局：有田市社会福祉協議会（宮本） TEL 0737-88-2750

mail aridashi.shakyo@gmail.com



新規参加  
申込フォーム

※スマホから読み  
とってください。